

関西大学工学部 学生員 ○仲道祐平
 関西大学工学部 正会員 島田広昭
 関西大学工学部 学生員 仲村和久
 関西大学工学部 正会員 井上雅夫

1. まえがき

海水浴場の利用者のなかには、サービス施設やそれによる賑わいなど、海辺の持つ開放的な雰囲気を求めてくるものも多い。しかしながら、海の家などのサービス施設の計画については、これまであまり検討されていない。本研究の目的は、ヒューマンファクターを考慮した人工海水浴場の造成指針を確立することであるが、ここでは、海水浴場のサービス施設に対する利用者意識の経時変化を明らかにしようとした。具体的には、淡輪および須磨海水浴場において、海水浴場の利用状況に及ぼすサービス施設の影響に関する現地調査を行い、これらの調査結果を1990年に実施された同様なものと比較、検討した。

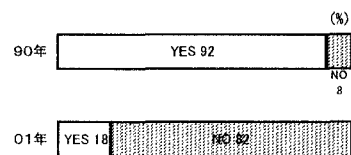
2. 現地調査の概要

現地調査は、淡輪では2001年8月3日(金)、須磨では2001年8月8日(水)にそれぞれ実施した。アンケートによる意識調査は、海岸環境と海の家などのサービス施設に対する利用評価や要望などについて、海水浴場の混み具合がほぼ一定となる調査日の12時から15時にかけて、直接面接法により行った。なお、調査対象者数は、淡輪が140名(男:84名、女:56名)、須磨が142名(男:81名、女:61名)の合計282名であった。

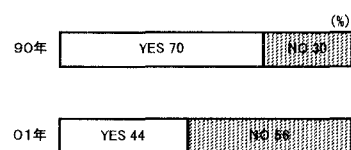
3. 調査結果および考察

淡輪海水浴場の特徴は自然環境に恵まれていること、須磨ではサービス施設が充実していることである。また、淡輪では、この10年間に、トイレや東屋などの施設整備や海水浴場における出入口の増設が行われてきた。一方、須磨では、1990年の時点で、海水浴場へのアクセスや海水浴場内外の施設整備はほぼ完了しており、この10年間で大きな変化はみられない。さらに、両海水浴場の年間利用者数はかなり異なっており、淡輪では、この10年間で17万人から10万人にまで減少しているが、須磨では、年変動はあるものの、毎年約100万人であり、ほとんど変化していない。

図-1には、海を家の利用度を示した。これによると、いずれの海水浴場においても、海の家を利用している人の割合は、この10年間でかなり減少している。特に、この傾向は淡輪で顕著である。これについては、景気の動向もその一因と考えられるが、淡輪ではサービス施設が利用者にとって満足のいくものになっていないことが最大の要因と思われる。すなわち、2001年現在、淡輪には、汀線延長が約720mのところ、3軒の海の家が設置されているが、いずれの様式も、昔ながらの和風(桟敷席の浜茶屋風)のものである。1990年には、海の家は4軒あったが、その中でもっとも利用度の高かった洋風(パラソル、デッキチェアなどで飾りたてた)のものが撤去されている。また、3軒の海を家の外観についても、10年間で大きな変化はみられない。一方、須磨については、汀線延長が約960mのところ、19軒の海の家が設置されている。これは、1990年に比べ、4軒減少している。しかし、その様式については、1990年の時点で、既に約半数が従来の和風のものから、洋風(パラソル、デッキチェアなどで飾りたてた)



(a) 淡輪



(b) 須磨

図-1 海を家の利用率

テラス風)の新しいタイプに変わっていた。特に、2001年には、さらに洗練された海の家が増えており、著者らの定義(栈敷席の有無)による和風の海の家であっても、その中には、一部栈敷席を有しているだけで、外観は洋風のものとはほとんど変わらないものが多い。また、1990年にもみられた、大手企業によるスポンサー付きの海の家もある。これらは、他の海の家と比べ、外観上も洗練されたものが多く、砂浜の背後に海浜リゾート独特の雰囲気を出している。このように、両海水浴場で海の家の様式が大きく異なるのは、その運営方法が全く違うためである。すなわち、須磨の場合、管理組合は土地の利用権を民間業者に貸与するだけであり、海の家の建設から営業まで、民間業者がすべて自由に行っている。一方、淡輪の場合、海の家の建設まで管理組合が行い、そこでの営業だけを民間が行っているため、10年が経過しても、海の家はほとんど改善されていない。そのため、須磨と比較すると、海の家の外観や雰囲気などに大きな違いがみられ、このことが海の家の利用率や集客能力にまで影響しているものと思われる。したがって、海の家の管理・運営は、その建設段階から民間に任せ、利用者にとって満足度の高いものにすべきである。

図-2および3には、淡輪および須磨の利用者がそれぞれの海水浴場に対して気に入っている点を示した。これらによると、図-2に示した淡輪については、1990年には「海や浜がきれい」や「景色がよい」など自然環境面のことを挙げている利用者が多く、また「にぎやか」な雰囲気を好んでいるものもいる。これに対し、2001年には「すいている」がもっとも多く、利用者の減少が皮肉にも長所となっている。また、この海水浴場の特徴である自然環境や遊技施設も挙げられている。一方、図-3に示した須磨については、いずれの年もほぼ同じ傾向を示しており、「広い」、「景色が良い」、「海や浜がきれい」など、海水浴場の基本施設に関するものも挙げられているが、「雰囲気」や「施設(海の家)」を挙げている利用者が多い。このことから、大都市近郊型の海水浴場では、海の家などサービス施設の充実が集客能力や利用者の満足度に大きく影響していることがわかった。

以上、大都市近郊型海水浴場については、交通アクセスや砂浜などの基本施設の整備が重要であるが、利用者が海水浴場を評価する場合には、これまであまり重要視されていなかったサービス施設やそれによる雰囲気の影響も大きいことが明らかになった。したがって、今後の人工海水浴場の整備に際しては、サービス施設の整備、拡充が課題となろう。

最後に本研究を行うにあたり、種々のご協力をいただいた大阪府や神戸市の関係各位、ならびに現地調査に大いに助力してくれた、関西大学海岸工学研究室の学生諸君に謝意を表する。

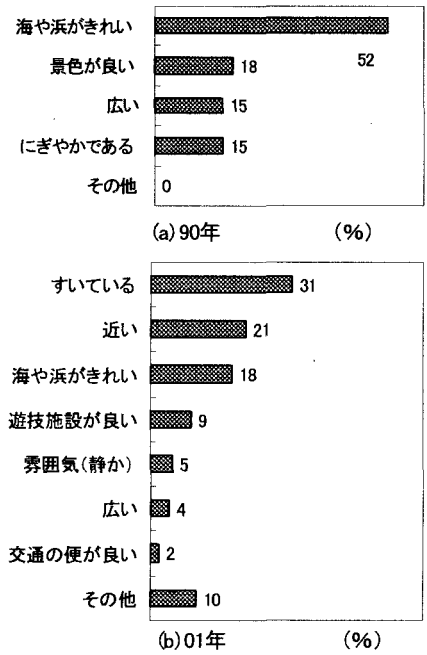


図-2 淡輪海水浴場の気に入った点

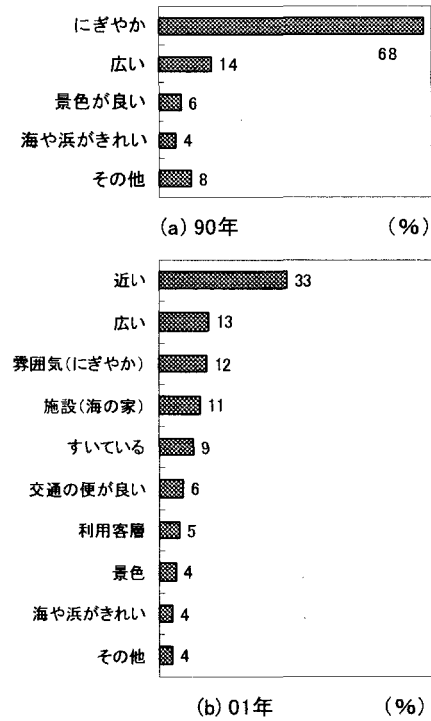


図-3 須磨海水浴場の気に入った点